
~ SWEAT SWEAT DAYS ~

森 更紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼ SWEAT SWEAT DAYS ＼

【Nコード】

N3124F

【作者名】

森 更紗

【あらすじ】

30歳独身で造形作家を目指すマリ。今何故彼女は一人きりなのか？過去に多くの恋愛を繰り返して来た彼女は、普通に恋愛し、普通に結婚し、普通に死んでいくものと漠然と考えていたが、今だその日は訪れる事は無い。モノを造り続ける事と、人を愛する事。その両者を手に入れようと思い、悩み、あがいて選択をしながら今を生きている。物事とはそうなるべくしてなるものなのだろうか。もしくは、その過去に確たる原因があるのだろうか。

FILE 1 輪郭から内部へ

窓の外は雨だった。

秋の雨。

アキサメ。ウツクシイ。

彼女は秋の雨が嫌いだ。なぜだろう。それは誰も知らない。知るはずもない。彼女は黙って窓を閉めた。道具を手に取り、粘土の塊の前に座る。雨の音に耳を澄ます。粒が、水の粒が地面を叩く音が、連続的にリズムを刻む。その粒は、全てを覆い尽くして行く。木々を、緑を、山を、道を、あらゆる建物を、人を、この世に有る全てを水の「まく」が覆い尽くして行く。

シトシトシトシト・・・。

シトシトシトシトシトシト・・・。

125歳1

カタカタカタカタ・・・。

カタカタカタカタ・・・。

日曜の午後、マリは部屋の片隅で小さく息をしている。

カタカタカタカタカタカタ・・・。

窓の外は雲一つ無い。秋晴れ。澄んだ空気と、金木犀の香りが街中に溢れていた。

「カタカタ・・・カタ・・・。」

片手に旧式の8ミリカメラを持って、彼女は唇を動かした。

「カタカタカタ。」

古くて動かなくなったカメラのファインダーを覗き込みながら、機

械の回転する音のまねことを続ける。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ……

涙が頬を伝って床に落ちた。

数ヶ月前、マリはその古ぼけた8ミリカメラを持って、知っている限りのカメラ屋を全てまわった。この機械で使えるフィルムと、専用の電池を探していたのだ。しかし、

「今はその型の物は製造していないから」

どこからもこの言葉が返ってくるだけだった。マリはひどく落胆した。胸のあたりが疼く。何も出来ないままに日々は過ぎていくだけだった。けれどそれから彼女はもうフィルムを探すのはやめた。よく考えれば、撮りたい物など何も無かったのだ。そして、たとえ電池が入っていないとも、フアインダーを覗けばそこには確かに映像が流れている。

いつもいつも、同じシーンばかりが繰り返されて。

明日からは、あの肉体が燃え尽きて灰に変わる。嘘のような事実。その事実は突然やってきた。なんの予告も無しに。ユキオは祭壇の前で冷たく横たわっていた。「つめたい」とは、本当にそのままなのだ。雰囲気とかそう言う事では無く、ただ「冷たい」のだ。水や氷の冷たさではない。今までに感じた事の無い、全く別の感覚。血の引いた肉体だけが持つ、特別な温度。

マリはその冷たくなったユキオの身体に触れながら、少し前までこの器の中でうごめいていた精神に意識を集中した。

「苦しい。まだ死にたくない。」

最後の思考。

『幾年分もの記憶。それに伴う愛情』
蓄えられた思考。

これらはみな、一体どこへ行ってしまったのだろうか。完全な消滅、或は全く別の空間へ移動しただけなのだろうか。

「死んだらそのココロはどこへ……。」

人間は死んだら本当に生まれ変わるのだろうか。だとしたら、ユキオは、私は。再び目覚めた時、この想いはほんの少しでも残るのだろうか。ならばもし、この地球という有機的な物質が破滅した後ならば、全ての魂はどこにいけばいいのだ。生まれ変わる為の新しい身体はもう見つからない。全ての幾億もの魂はどこへ……。その哀しみは、型を持たないまま宇宙を浮遊し続けるのか。恋も出来ず、夢も見れない。肉体が無ければ、終わりは永遠に來ない。産まれず、大人にもなれず、死ぬ事も無く。ただかつての栄光を懐かしく想い、断末の哀しみを繰り返し、暗く碧く、何処までも終わりの無い空間を泳ぎ続けるだけ。溺れかけても、探す陸も無いままに。無限に。母親を無くした赤ん坊のように。泣き続け、泳ぎ続けるだけ。

マリは直面している事実を飛び越え、死の意味について思いを巡らせ始めていた。

「本日は遠くからわざわざ兄の為に有り難うございます。」

それは、三歳年下のユキオの弟だった。

「いえ……。こちらこそ、突然の事で驚きましたが。色々忙しい中、連絡下さって有難うございます。」

「家族も兄が死んだなんて、正直まだ実感がわきません。一昨日の朝だっていつもどおり普通に仕事に向かってただけなんです。毎日顔を会わせてるから、最後に交わした会話が何だったのか、それすらも思い出せないなんて。」

マリは目を閉じて、ユキオの弟の言葉を聞いた。

「マリさんと会ったのは、もう7年も前ですね。」

「はい。」

「マリさんが東京に行ってしまったわってから、兄は無口になりました。

「ごめんなさい。」

マリは目を閉じたまま会話を続けた。

「それから兄も一時アナタを追うように東京へ。僕が言うのもおかしいですけど、二人はそのまま結婚するだろうと思ってましたよ。でもきつと、二人にしか分からない事が色々とあったんですね。」

「・・・。」

「大丈夫ですか。」

「声・・・。」

「え・・・。」

「アナタとユキオ、声がとても似てる・・・。今まるで、彼と話してるみたい・・・。」

マリはゆつくりと目を開いた。しかし、目の前にいるのはユキオでは無い。何度も目を閉じ、開いた。けれど、いくら開いてもそこに生きたユキオはいない。誰もが認めなくてはならない、本当の「死」のみだった。

葬儀から火葬の全てを終え、寺の住職が説教を始めた。

「私は故人が幼い頃から、よくお姿を拝見する事が有りました。御両親と共に墓参りに来ては、ご先祖の墓石を丁寧に掃除し、一生懸命に手を合わせていた姿からは、とても綺麗な心が見受けられました。彼が小学生の頃、夏休みに交通事故に合われた事は、ご家族の皆さんももちろん覚えていらっしやと思います。私はちょうどお盆で檀家さんのお家のお経をあげに行く途中、その現場に遭遇したのですが、車にはねられた直後で、明らかに足の骨が折れているであろう状態にも関わらず、彼は私の手を振りほども、歩き出そうとしたのです。何処へ行こうとしているのかと訪ねると、小学校で飼っている山羊に餌をやりに行かなければならないと言っのです。もちろん彼は怪我をしていましたから、自分の足で歩く事は出来ませんでした。そのまま泣き出してしまったんですね。私が『痛み

がひどいのか』と訪ねると、彼は首を横に振り、こう言いました。
『僕が行かなければ、山羊がお腹をすかせて死んでしまう』と。故人は、とても純粹で責任感の強い人物だったと見受けられた事を強く覚えています。それだけにこの死は残された者にとっては、受け止め難い事でも有るでしょう。しかし、仏教の教えでは、人間の死とは、現世での修行の終わりを意味するのです。この世に於いて、人間はあらゆる修行を積まなければなりません。そして、徳を積み修行を終えた者から、仏様の元へ参る事ができるのですね。早すぎる死はすなわち、人より早く多く徳を積んだからこそ仏の元へ帰る事が出来たと考える事も出来る分けですから、どうぞ、故人とのお別れはただただ哀しまず、送り出して頂きたいものです」

そう、ユキオは「生きる事を終えるのを許された」のだ。彼は常に自分の感情と闘っていた。親友にすら見せないエキセントリックな内面。マリはそれを共有していた。上手く生きられないと嘆いていた。純粹で責任感があり、慕われていたその裏側なんてみんな知らない。親しい人間の理不尽な行為に直面し幻滅したとしても、逆に自分が吸収する事で、物事を納め、その都度深い所で傷だらけになっていた。今になってユキオという人間が確実に見え始めてきた。眼に見えなくなって初めて、更に深い深い不可視の世界にこそ、本当のその存在の形が現れる。

あのしなやかな二脚で立ち振る舞い、談笑しては人を笑わせ、熱くうそぶいて狂人的な妄想話を語り続けていた日々の姿は、もう何処にも影をとどめてはいない。灰になって煙と共に空に消えたユキオ。

マリは外へ出た。少し離れた火葬場の煙突からは、まだ煙がうっすらと立ち上っている。その空気を吸い込んで思った。永遠に一つになる事は出来なかった自分とユキオ。今吸っているこの空気、もしかしたらほんの少しだけ、ユキオの一部が溶け込んでいるかもし

れない。こうしてようやく私はユキオと一体になれたのかもしれない。「別々の両親から産まれたけど、もとは一つのDNAだったんじゃないの、俺たち。」いつかは言っていた。

自分の体の中には今、ユキオがいる。

FILE 2 白痴な夜

― 18歳 ―

「コンビニで氷買って来て。」
受話器の向こうで聖が言った。

夕刻になり、言われた通りにロックアイスを二袋買い込み、マリは聖の家へ向かった。大通りから外れた小道に入ると、街の明かりもまばらで、離れて建つ家々の平凡で幸福そうな窓からこぼれる灯りと月の光だけがその家へのたよりだった。真夏の夜は最高潮に達し、虫の声と昼間の刺すような太陽の残り香だけが切なく漂っている。

真つ暗な道無き道の向こう側に、ぽつりと蛍の光のような聖の家の窓を見つけた。その奥には、数々の人影が揺れている。

「久しぶり。」

見慣れた顔とそれぞれに挨拶を交わす。聖は短く刈って青く染めた髪で、マリに可愛らしく微笑みかける。いつもの嘘くさい笑顔だ。学校が夏休みに入ってから、彼等が会うのは初めてだった。片手にはビールの入ったグラス。皆、まだ飲み慣れない酒を浴びるように無理矢理喉の奥に流し込んでいる。リビングと庭側の窓を開放し、ふらふらと歩き回る。ステレオからは、彼等の好きなオルタナティブやグランジが爆音で流れている。広い部屋の中に、まだたった18歳の彼等は、小さな世界を造り始めていた。安っぽくて、今だけの幻想の世界。ここではほんの少しだけ呼吸をしている気持ちになれる。

「久しぶり。」

振り返るとユキオがいた。黒い टीーシャツ から露出された肌は程

よく焼け、夏を感じさせた。驚いたのは、そこから伸びた二本の腕だった。以前の蒼白い彼とは見違える程、それはたくましく、肩から腕への筋肉が男である事を主張しているのだ。

「髪、延びたんだね。」

数年振りに会ったのに、こんな事しか話す事は見つからない。

「切る金がねえんだ。お前は今も、絵描いてるのか。」

「うん、相変わらずね。ユキオは今、何かしてるの。」

「特に何も。あ、でもドラムは続けてる。」

淡々と会話は終わった。

男ばかりの中、部屋の奥に一人女の子がいる。彼女は昨年まで、マリと同じクラスにいたアヤだった。その後高校を辞め、街に出て一人暮らしを始め、聖と付き合っていると聞いていたが、まさかこの田舎で再会するとは思わなかった。

テレビには、Sex Pistolsのシド&ナンシーのビデオが映し出されている。マリは彼等から少し離れ、一人見るとも無くぼんやりと壁にもたれかかって画面を眺めていた。隣の部屋からは、酔って興奮しきって騒ぐ皆の声が漏れてくる。しばらくすると、この部屋にユキオが入って来た。黙って彼女の隣に座り、体をぴたりと密着させ、画面を見るフリを続けている。

「あまりくっつかないで。」

「なんで。」

「暑いじゃない。」

ブラウン管の向こうでは、シドのそっくりさんがマイ・ウェイをだるそうに歌いながらステージの階段を降り、客席に向かって銃をぶっぱなしている。なんて内容の無いストーリー。しかし、よくここまで似た役者がいたものだ。二人は関心した。

「知ってた、この役者、ゲイリー・オールドマンだって。」

「へえ、前にも一度見た事あったけど、全然気づかなかったわ。」

彼にもこんな時代があったとは少し驚きつつ、よく見ると、確かに

その役者の今の顔と重なった。

突然、ユキオは何も言わないまま人差し指を強引に、マリの口の中に突っ込んだ。それをゆっくり舌の上で掻き回すと、その指を自分の口へ運んだ。

「馬鹿、何すんの。汚いじゃない。」

彼女は激しく抗議した。それはひどくエロティックな行為に映る。しかしその胸は少しだけ早く鳴っていた。

「マリーのモノなら何でも・・・。」

彼は美味しそうにその指を吸い上げて、にやりと笑うだけだった。その時、ふとすっかりわすれていたマリの昔の記憶が頭をかすめた。

放課後の教室で、机を挟んで向かい合う14歳のユキオとマリ。

グラウンドからは金属バットがボールを弾く音や、体育館の床を刷れる靴音がだけが響き、二人だけの真つ白な教室の中はぴたりと静まり返っていた。机の上にはピンクのケースのリップクリーム。彼はそれを回しながら出したり仕舞ったりを繰り返して、玩んでいた。

「これ、いつも塗ってたの。」

「いい匂いでしょ。」

彼はマリの唇に鼻先を近づけて匂いを嗅いだ。

「ほんとだ、ねえ、この唇、食べてもいい。」

「え・・・。」

「マリーのモノなら何でも・・・。」

二人の距離は短くも、長くも無く、微妙な関係にいた。実際にはここ数年殆ど会う事も無かったのに、マリのそばにはいつもユキオの影があった。

夜も深くなり、窓の外には明かり一つ無く、姿の見えない虫達の鳴き声だけが響き続けている。ここだけが別世界であり、大海原に浮かぶ無人島のように息をしていた。少年達は、ぼっかり浮かぶマ

ンガみたいな丸い小さな島の上で、たった一本のヤシの木の下で眠っている。ただし、助けを待っているのではなく、このまま時間が止まるのを待ちながら。

「こっちにおいで。」

ユキオはクツションを頭の下に当て、右腕を大きく投げ出して優しく言う。マリは言われるままに、彼の腕に頭を乗せ、重くないかと気にしながらも、顔にタオルを被りそのまま眠ったふりをする。

誰かに眠っている顔を見られるのは嫌だった。その顔は自分では見る事が出来ないから、何だか恐いのだ。本当はちつとも眠くなど無かった。蒸すような暑さの中、上半身裸の彼の脇腹からは、じつとりとした熱い汗が滑り落ち、マリの身体のあらゆる部分も汗の粒で覆われ、そこに濃縮された重い空気を漂わせていた。

月の光だけがうつすらと差し込む部屋の中で彼等は眠る。あるいは眠ったふりをする。暗闇の中には、何人もの寝返りをうつシルエツトが映る。マリはタオルからほんの少し覗かせた目で、寝付けないうままにそんな様子をただ眺めていた。

寝ていたはずのユキオの手がゆっくり忍び寄り、顔の上のタオルの下を這うと、その熱っぽい指先が彼女の唇をこじ開け、さっきのように口の中を掻き回す。横目に見えるユキオは、軽く閉じた瞼の睫毛を頬に落とし、眠っているかのように真上を向いて動かない。けれど、指先だけがナメクジみたいに彼女の唇や舌を撫で回し続ける。それに答えるように、その細くしなやかな指を軽く噛んだり、舌先で追いかけた。舌が疲れる程に玩ばれ、堅く唇を閉じたが、今度はその指が強引にゆっくりと出たり入ったりを繰り返し始めた。唾液まみれになった指先が、口の周りを濡らす。それがどのくらい続いたのだろうか。彼女はとてつもなく長く感じていたが、いつしかそのまま眠っていた。そして、再び目が覚めたのは激しく胃が痛みだしてからだった。身体を起こして、しばらくそこに座り込む。内側から針で突つくような胃の痛みは治まらず、ユキオは隣で眠っ

たまま。

「どうしたの。」

押し入力でアヤと眠っていたはずの聖が、上半身を起こして小声で言った。

「急に胃が痛くなつて。」

聖はそこから降りると、台所へ歩いて行った。マリも着いて行き椅子に腰掛けると、彼はコップに水を注ぎ、丸い錠剤と一緒に手渡す。「口移しで飲ませてあげようか。」

「ばか言わないで。」

二人でクスクスと声を殺して笑い、薬を一気に胃に流し込んだ。

もといた部屋に戻ると、マリと聖は座り込んで小さな声で喋り始めた。

「アヤとは上手くいつてるの。」

「うん。」

「驚いた、二人が付き合い始めてたなんて。」

「アヤ、実家出たんだ。で、今一人暮らし。学校の帰りに偶然会つてさ、そのままなんとなく気が合つて。」

「彼女が学校にいた時には、アンタ達、全然話したりもしてなかったのにね。」

「ね、不思議だよね。アイツ、家が結構複雑みたいでさ。とにかくそこを出たかつたんだって。」

「ん、なんかちよつと聞いた事有る・・・。」

聖は愛おしそうに、語った。聖は好きな子が出来ると、いつもマリの家までやって来る。そのまま延々、いかにコイビトを愛してるかという事を、マリを無視して話続けるのだった。まるでクラスの女の子みたいだと、マリは心の中で思っていた。

「でも、時々不安になるんだ。」

「何が。」

「アイツ、ちよつとした事で爆発的に嫉妬するんだ。で、そのまま白痴になっちゃう。手がつけられない。」

マリは、いつもの聖の長話しが始まったと、聞く事も無く相槌を打ち続けるだけだった。

「……。」

聖はマリの顔を見て、笑った。その笑顔が、スローモーションの様に、ゆっくりと崩れ始める。ひどくゆっくりと。

「……。」

聖のか細い手の甲に、涙が落ちた。ぽとぽとと、何粒も。その顔はくしゃくしゃ。

「ちよつと。どうしたの。」

「ごめん、色々あつて……。」

「泣かないでよ、そんな事で。」

マリは冷たく言い放った。聞いているといつも彼女はイライラし始めるのだった。そして思った。なんて綺麗な涙なんだろうと。黒く長い彼の睫毛は、すっかり濡れていて、ビロウドみたいにキラキラしている。

「聖、クスリ有る。」

「え、さつき飲んだでしょ。」

「そうじゃなくて……、アレ……。」

「ああ、有るけど……。」

「何でもいいわ、お願い。ちようだい。」

聖は棚の引き出しの中から、紙製の箱を手渡す。マリはピンクのそれを十錠ほど手の平に転がすと、そばに有った飲み残しのジンで噛み砕きながら飲み干した。

「じゃあ、オレも……。」

彼も同じように何錠かを飲んだ。

気持ちはずぐに膨張し始めた。胃の痛みも、徐々に消えて行く。何日振りかのこの感覚。大きく息を吸い込むと、全てがいつも簡単に幸福に包まれ始めた。生きてる事が、ここにいる事が、傍らに有

るつまみのビーフジャーキーの形がイノシシに見える事が。何てハッピーで、楽しいんだろうか。

そのビーフジャーキーを月明かりに透かして、見つめる。ただただ可笑しかった。

「誰がいる。」

マリは立ち上がり、ソファーに向かって歩き、その下を覗き込んでみた。

「どうしたの。」

「変な男達がいるの。顔が凄く細長くて、一人は頭に紙袋被つて……。なんてチビなの。」

「俺達の他は誰もいやしないよ。」

「あ……。やだ。あたしたちのこと、写真にとってる。気持ち悪い、気持ち悪いよ！こいつら、ここに隠れてるつもりなんだわ！こんなのかしちやえ。」

マリは必死になって、そのソファをどかさうとした。

「マリー、駄目だよ。おいで、みんなを起こしちゃうだろ。」

聖は子供をなだめるように彼女を静止しようとする。

「だって……。死んじゃうよ。みんなこいつらに殺される。助けなくちゃ。」

マリは本気でそう思い込んでいる。

「大丈夫、オレが後でやつつけておくから。こっちに来て、寝なよ。」

「本当に？」

「ああ。」

彼女は少し安心して、またユキオの腕枕に寝転んだ。

何て居心地がいいんだろう。再びやって来た幸福感。ふと視線を上に移すと、丸い大きな電気傘の上で、手だけが白い真つ黒な猫がいる。闇の中で1つの目を光らせて、こっちを見つめている。微動だにせずに、ただ静かに。

「この家、猫なんていた？」

冷たく渴いた瞳は、マリを凝視し続ける。何故だか目をそらせない。波のように、幸福と不安が交互に押し寄せる。

「可愛そう、片目が見えないのね。誰にやられたの？きつとこの辺にひどい奴がいるのね。ああ、そうだ。多分子供だわ。あれは、本当に残酷で可愛い生き物だから。だからあたし、子供って大嫌い。」
「ねこ・・・？」

寝ていたはずのユキオが、目を覚ました。

「そう。ほら、あそこにいるでしょ？あの子、片目をなくしたの。かわいそうな子。」

「全部幻覚だよ。その猫も男達も。クスリ、やってるのか？」

「しってたの？」

「ちよつと聞いたただだよ。」

「どうせ、ダメな女だって言われてるんでしょ？」

「理由があるんだろ？」

「べつに分けなんてないわ。ただ、この感覚がたまらなく好きなので。」

ユキオはいつも、何でも見抜いていて恐いとマリは思った。

「・・・ねえ。子供って幾つまでなの？あたし達って子供？それとも大人？」

「子供のままでいたいのか？」

「わかんない。子供は大嫌いだけど、大人になるってこと考えるとなんか汚れていく気がして。それももの凄くいやなの。」

ちゅうぶらりんな18歳は、不安の塊だった。

ある偉ぶった大人の男が言った。

「君たちの絵は、全部嘘っぱちだよ。」

彼の言ってる言葉の意味を、分かるが認めたくなかった。嘘って何だ。人が何かを創りだしてそこに生まれた瞬間に、たとえそれがか

つての誰かのモノに類似していたとしても、それは決して同じ物ではない。新しさのかけらや、驚く程の新鮮さや、言葉で説明出来る理屈が無くても、それに善悪とか嘘や本物だなんて言う権利は誰にも有りはしないはずなのに。腐っている大人。

何故絵を描くのかと聞かれる事はよく有る。その度に、上手く答えられず自問自答を繰り返した。受験制度とか、新しい文化や価値観の中でもみくちやにされて、答えなど出るはずも無い。ただ、止められないから、やり続けて今日まできているだけなのか。

「美術は価値観のぶつけ合いなんだね。」

メガネをかけた、神経症の男の子が眉をひそめて言った。その意味も、その時は分からなかった。

けれど今の自分なんかでは、何の為にとか考えること事態が始めから間違っているのかもしれない。何かの使命を持つてるほど大それた人間でない事は充分に分かっている。そんなおごりは無い。誰かに何かを伝えたいとか、科学的な事を平面を通してとか、見る物と対象の関係の実験とか、全部どうでも良かった。始めから、私の脳はそんなに賢く優秀では無い。ただ、自分の為に。それしか分からない。

音楽家が曲を書いて、演奏している瞬間が至福の瞬間だというのなら、私の場合もそれと同じなだけ。第三者の存在は無視している訳ではない。ただ、念頭には置いていない。本来、自分が何を本題にしてその作品を創ったのかなんて、壁に掛けられたその一枚を見ただけで、他人が理解出来る訳など無い。説明書がない限り。けれど、自分が納得している物を誰かが見た時に、解釈の仕方はそれぞれ違ったとしても、何かを感じてくれればそれだけでいい。ある種の感動をもってくれば、発表した事に意味が生まれる。両者の関係が成立する。自然な流れでいい。押し付けるのは傲慢だ。むしろ、その偶然性が一番大切。言葉や文章では現せないから、美しい。

それでも、もしあの人がい放った一言が真実だったら、私達は

何処へ向かって走っているのだというのか？今ではもう、走っているのか歩いているのか、それとも立ち止まっているのかさえ分からなくなり始めている。

「芸術は死んだ。」

また別の人が言った。私達は一体何者なんだろう。死骸に向かつて走っていたのか。というよりも、私達自身が意味の無い価値の無い死骸なのだ。真っ白な未来なら、いつその事このまま一瞬に壊れてしまえばいい。

「お前もこっちに来い。」

ユキオが聖を呼ぶ。聖はマリをユキオとの間に挟むように横たわり、一緒にその腕を共有した。そしてユキオはそのまま覆いかぶさるように彼女を抱いた。180センチもの長身に、その体はすっぽりと包まれる。彼は彼女の頭を掴むと、思い切り噛み付いた。マリはバカにしたように笑った。抱きしめる腕は、次第に胸の上を目指して移動する。シャツの上から、軽く掴んだ。

「やめてよ・・・」

マリは弱々しく抵抗するが、ユキオは黙ってブラジャーのホックを外し、シャツの中にすると手を滑り込ませる。聖も同じように、反対から手を差し入れた。クスリの効果が切れ始めたせいか、極度のだるさと眠さがマリを襲う。彼等の事は、もうどうでもよくなってきた。面倒になり、彼女は人形のように、二人の前で抵抗するのをやめた。

ユキオは指先で乳首をなぞる。何も感じない身体が、ぐにやりと横たわっているだけだった。

「俺、浮気してる。いままでこんな事なかったのに。」

ユキオが独り言を呟いた。彼女はされるがままにただ上を見ると、ベッドの上から、まだ16歳のタケシがその光景を、息を殺してみ

ていた。そのあどけなさの残る瞳をじつと見つめる。ただ、お互いに何も言わなかった。

遊ぶことに気が済んだのか、ユキオは後ろから両腕と両脚でマリの身体を力いっぱい抱きしめる。そして両手で顔を包むように掴むと、痕がつくくらい強く額にキスをする。つられて聖もその頬にキスを。何を考えてるのか。少なくとも、それを受け入れているマリは何も考えてなどいない。挨拶みたいにしただけで感じていない。ただじつと黙って受け入れるだけ。身体だけを捧げる。

夜はまだ明けてはいない。またタオルを被って眠ろう。隣のユキオも、次第に寝息をたて始めていた。が、聖はまだ覚醒が続いてるらしい。次第に取り残され、一人で遊び始める。ユキオの腕に吸い付いたり、鼻をこすりつけている。変な小動物のようだ。さらにユキオににじり寄り、寝付こうとする寸前の彼の頬にしつこくキスをして、ずるずる蠢いている。もう眠りたい。マリは思っていた。とばっちりを受けないよう。

タオルを目の上まで上げ、寝たふりをしたが、放っておいてはくれないかった。相手にしてくれないユキオをあきらめ、彼女の肌に鼻をこすりつけた。黒目がちな彼の風貌から、その様子は見ようによっては可愛らしくも有る。

そしてそのままタオルの中に入っていった。同じように鼻先をマリの頬や鼻や唇に押し付けているのだ。頭がおかしい子みたいだ。彼女はただ、笑いをこらえるのに必死だ。が、突然聖は素に戻ったように一瞬静止したかと思うと、彼女の口に唇を重ねた。その感触は恐ろしく柔らかく、まるであたたかいゼリーのものであった。狂ってる。

マリはとつさにタオルをはぎ取り、起き上がった。

「聖にキスされた!」

周りで眠る仲間をはばかりる事無く、言い放つ。

「嘘?」

「ほんとに・・・。」

ユキオはしょうがないなという風に口の方端だけを引き上げ、聖も他人ごとのようにヒツヒツと腹を引きつらせて笑っている。マリはただあきれて、部屋の真ん中でつつたまま聖とユキオを見下ろしていた。

太陽はけだるく一番高い位置に登り詰めていた。短いようで、長く、そしてやはり短い魔法の時間は、とうの前に終わっていた。一人、また一人と起きだし、もうろうとした頭でみな黙ってタバコをふかしている。

「アヤ！」

彼女は何も言わずに怒った足取りで奥のバスルームへと歩いて行く。何かあったのか。もちろんあったのだが。その後を、慌てて聖が追って行った。二人はしばらくたつても戻らない。

「俺、ちよつと見てくるわ。」

ダイキは立ち上がると部屋を出てすぐに戻って来た。

「なんか変な音してた。」

そこに居る者は声に出さずににやりと笑う。

そしてここへ戻って来たアヤは一目もはばからず外していたブラジャーをつけ直すと、

「自販機。」

とだけ告げ、家の外へ出て行った。

窓からは、だるそうに歩く後ろ姿が見える。敷地内を出る手前ほど行くと、彼女はそのまま砂埃のひどい地面の上にゆっくりと倒れた。うつぶせのまま動こうとしない。

部屋の中から見ていた聖は、慌てて靴を履き、アヤに駆け寄った。会話は聞こえないが、何か叫びながら必死にアヤの腕を掴み、立ち上がらせようとしている。彼女にはまるで、自分の足でたつ意志がなく、また倒れ込んだ。おそらく、昨夜の様子に気づき、じっと我慢しながら眠ったふりをしていたのだらう。そして全て嫌になって

しまったのだ。ただの、内容の無いコミュニケーション。賢くないマリとユキオと、聖。

こんな私、誰も本気で愛しはしない。愛されてみたいが、誰かに自分をさらけ出すなんて恐ろしくて出来ない。このまま本当の交わりを味わう事も無く、死んで行くのだろうか。そう考えるのは、マリの癖みたいなものだった。

FILE 3 記憶の解放

太陽はまだ、キツく照りつけ続けていた。マリは日陰の無いただつひろい田舎道をのろのろと歩き、なんとか家にたどり着いた。玄関の鍵は閉まっている。裏口をまわってみると、自分の部屋の鍵は開いている。高い窓をよじ上り、そのままベッドに倒れ込んだ。死んだように深く深く眠った。

その間、彼女はくつきりと描写された夢を見ていた。

昨日の仲間達とマリは、得体の知れない街に向かって水の中に立つように歩いていた。視界は全て水。高層ビルや街路樹は半分くらいの高さまで水に沈んでいる。彼等は体に何も付けてはいないのに、当たり前のようにそこに垂直に浮いている。冷たいとかいった水の感覚も無い。何が目的なのか、それは誰一人分かっていないのに、彼等は明るく談笑しながらゆっくりと水を掻き分けながら進んで行った。

ふと前方を見ると、100Mの高さはあるであろう、人の記号の形をした（きわめてシンプルな）真っ黒なうすっぺらいそれが蛇のように頭をもたげて、動く壁のような津波と一緒にこちらに迫って来た。確実にこちらをめがけて。危険を感じた時には既に遅く、波は容赦なくマリ達を軽々と一口に飲み込んだ。

しかしそれは夢。立体映像を見るようなものだ。水の感覚は相変わらず無ければ、苦しくもない。髪も服も濡れてはいない。何事も無かったかのように、巨大な記号も消えてしまった。けれど、背後ではいつの間にかユキオが彼女を支えてくれていたのだった。

夢はそこで覚めた。

マリしばらくベッドの上に座り込み、ぼんやりとしたまま考えてみる。何か意味があるのだろうか。

自分でも気づいていない、内面の変化か何かが。

ベッドから這い出ると、キッチンへ行く。卵をフライパンで焼く。レタスとハムに、ケチャップとマヨネーズを塗りたくり、その卵焼きをまとめてパンに挟んだ。キッチンに立ったまま、熱いコーヒーと一緒にそのサンドウィッチを流し込む。味わう事無く、ただ空腹が満たされればいいみたいに。

壁の時計を見るともう夜の九時だ。そして、電話のベルが鳴る。

「もしもし。」

短く相手が言う。男の低い声。相手はユキオだ。

「マリー、俺さ・・・。」

「何？」

マリーは彼が何を言おうとしているのかを瞬時に感じ取って、あえてさらっと返してみた。受話器越しから迷いが伝わって来る。絞り出すように、彼は言う。

「少し好きになった。」

「私、前からあなたの事は好きよ。」

彼女は彼を愛してはいない。それどころか、愛するって意味はよく分らない。でも誰かに愛されてみたかった。好きなら分かる。甘い物は好き。着飾る事も、かっこいい男の子も、かわいい女の子だ。そして彼の事ももちろん好きだ。たぶん最初に会った時からずっと。

その頃のマリーの心はひどくきりきりとヒステリックに浮き沈みする毎日だった。

一方的にぶつける言葉で他人を傷付け、後になっていつも後悔ばかり。自分で自分がコントロール出来ない。いつからこんなに人を煩わしいと感じるようになったんだろうかと、家でも、満員電車の中でも、学校の教室やアトリエでも、常に考えていた。一人は嫌だ、しかし人にまぎれば一人になりたくなる。自分が二人いるみたいだ。一つの身体の中に。毎朝が頭痛と吐き気との格闘。

自分以上に感情をぶちまけるクラスメイトにも、技術と理屈と自

分の個性を押し付ける事でしか教えられない美術教師にも、全てに吐き気がしていた。けれどそんな中でも、ユキオだけは違っていた。違う高校へ行つてからは、たまにしか会う事が出来ない中でも、会えば瞬時にして様々な型で、薄灰色でガチガチに固まったマリの心を受け止めてくれていた。

彼女は受話器を耳に当てたまま鏡の前に立つて、寝癖だらけの髪をなおしたりしてみる。

「あの時のキスの痕、おでこに残って消えてないわ。」
額には子供の爪くらの大きさのうすピンク色の痕が残っている。それを指でなぞってみる。

「前に言つたよな。俺の中でお前はかわいいペットみたいなものだつて。」

「そういえば、昔そんなこといつててわね。」

「ああ。でも・・・、なんか違つてた。」

「嘘。聖にもあなたにとつても、私はそこらへんにいる動物と同じなのよ。あなたの好きな蝉や蛙と変わらない。」

「お前は人間で女だよ。」

最初にペットだつて言つたのはユキオなのに。

「恐いの。」

「何が恐いんだ？」

「何もかも全部。身体を全て見せるのも、ココロを全て見せるのも誰かに全てさらけ出して裏切られるのが恐いの。本当の私を知つたら、あなたきつとすぐに逃げ出すのよ。」

「けど、気になるんだ。今までとは違う。つい数時間前の事だけど、久しぶりに会つて、なんかよく分からないけど今までと違う気持ちになつてるんだ。」

「・・・。」

マリは思い出した。もう二度とあんな目にあうのは嫌だった。同じ事が繰り返されるかと思うと、身体が硬くなつていく。受話器を

握る指先が、次第に冷たくなっていくのが分かる。まだ私の中では17歳のままのジュンの目がちらつく。切れ長の。その目は私を見てはいない。引き出しからクスリを取り出す。また一気に二十錠程飲み干した。

夜の公園でユキオを待った。昼間の熱が引きひんやりとしたベンチに座り、むせ返る草木の匂いに包まれながら。遠くから400ccのバイクの爆音が空気を震わせてだんだんと近づいて来る。その爆音は公園の前でぴたりと停まった。彼は彼女の方へとゆつくりと歩いて来る。深く帽子を被り、黙ってベンチの端に座る。彼女の方をちらりとも見ずに、そのまま遠くを見つめている。その横顔はいつもよりも頼りなくうつった。おもむろにジューパンのポケットからつぶれたセブンスターを取り出すと、口にくわえ火をつける。眉間をしかめ、ゆつくり深く吸い込んだ。まずそうに煙を吐き出すと、ようやくぼつりと話し始める。

「今日、さつきカコに会って来た。やっぱり駄目だ、あいつを裏切れない。だけど、お前の事気づいちゃったからもうどうしようもねえ。」

「裏切るも何も。私達は変わらない、今までと。それでいいじゃない。」

「。。。。」

「私はどうする事も出来ないのよ。それに、彼女と別れる事は間違ってる。」

「あいつとお前、同じくらい好きなんだって言ったら、ひっぱたかれた。あんなに恐い人間の顔、初めてみた気がする。」

「あたりまえでしょ、ふつつ。私は腹なんか立つわけ無いけど。あなたは、嘘がつけない人なのね。」

彼は相変わらずマリの顔を見ない。帽子の下では、彼の表情をとら

えられない。

「しょうがないの。あなた達はもう一緒にいて二年になるでしょ？そこへ私が入り込む隙間なんて、最初から無いの。1ミリだって。彼女、ずっと私の存在気にしてたみたい。会った事ないのに。あなたとだって、殆ど会ってないのにね。でも、あなたが私の事よく話すから『マリーさんってどんな人？』って聞かれたって誰かが言ってたわ。」

マリは妙に冷静だった。彼と話しながら、頭の中ではジュンの事を思い出していた。

まだ14歳だったマリは、この田舎町から電車で20分程度で出れる街のライブハウスに、週に一度は通っていた。そこで出会ったのがジュン。当時彼は17歳。印象的な黒い切れ長の目と白い肌に冷たく刺々しい外見、マリは一瞬で夢中になった。出会ってから間もなく、彼は毎日のように電話をかけて来ては、妹のようにマリを可愛がった。

「もし俺に妹がいたらめっちゃ可愛がってたと思う。」

ジュンは彼女の為だったら、なんだってした。彼の家からは二時間以上かかるマリの学校までわざわざ迎えに来たり、食事も交通費も全て彼が出した。同級生の男との付き合いとは違う。その頃の彼女からしてみれば、ジュンは大人に見えたのだろう。

「俺って、ロリコンなのかな。タカシに言われた。」

「かもね。」

「好きなんだから、しょうがねえよな。」

もしかして、この感じが愛なのかとマリは期待をする。誰かの為に何かしたいとか、ずっと一緒にいたいとか。世の中の男と女は、こうして相手を求めて信じ合って結びついているのだと。

この人なら、そういうモノを教えてくれるんじゃないかと。

けれど、その頃のジュンには一人の女の子の影があった。前に付き合っていたという子だ。彼の部屋に遊びにいった時の事、ふと彼

の革ジャンのポケットに手を入ると、中に紙のような物が入っている。ジュンはシャワーを浴びている最中だった。何気なく取り出すと、それは一人で写る女の子の写真。誰？胸のリズムが複雑に乱れる。写真をポケットに戻し、何喰わぬ顔で考えたが、彼に直接聞く事は出来なかった。

その日はそのままずっと、笑う事だけが出来ないマリに、ジュンはすぐに異変を感じ取っていた。

数日後、マリはジュンの革ジャンを借りる事になった。髪をハリネズミみたいに立てる為の、ダイエースプリーの香りが染み付いている。ライブハウスに充満する汗とスプレーの香り。彼女の精神安定剤。それを着込み、ポケットにタバコを入れようとした時、その指先に紙くずの感触を感じ取った。細切れの紙くずを残らず取り出す。それはどうやら一枚の写真のようだ。

一つ一つの破片をパズルみたいに組み立てる。

出来上がったそれは、この間の写真だった。マリより年上の、ずっと可愛い女の子。ちゃんとした。写真の中の彼女は、好きな人の為だけの極上の笑顔で微笑んでいる。これ以上ないくらい、優秀な笑顔。

自分は、こんなに素敵には笑えないと、彼女は悲観する。

そしてすぐにこれは、ジュンからのサインだと察した。様子のおかしかった彼女への。初めてこの男の冷淡さを知った。その反面、自分への想いに安心したマリは、ようやく素直に身体を投げ出した。生まれて初めてのキスは、マンガやテレビとは違って、グロテスクけれど、彼女の中に入って来る彼は温かかった。人の体温に感動した。この事実を何度も確認する。妄想ではない、本当に起こっている事だと。この先もこんな温かさで過ごせるなんて、自分はなんてついてるんだらう。自分はジュンのものになれたと、マリは歓喜していた。

けれど、それから幾日も経たないうちに、何の予告も無しに、彼は身をひるがえしたのだった。悪い結果は、ただの考え過ぎだと言

い聞かせながら、待ち続けた14歳のマリ。それにも疲れ果てた頃、絶望の縁で、だけどやっぱりねなんて思うしか無い。

身も心も枯れ木みたいにすっかり力サカサに乾涸びてしまっていた。

覚えた事。誰も信じるな。本当の自分は見せてはいけない。期待するな。

その時から、彼女はすっかり錆び付いてしまった。17歳のままのジyunを引きずって。

ただ、もし再び彼に偶然逢う事があつたら、きっとマリは彼を許してしまつたろう。彼女は誰でも簡単に許せてしまふ。どんなに吐き気を催す相手であつても。だからやっぱり自分が分からなくなる。

一人が恐いからだろうか。

ただ、信じる事は、もう二度とは無い。

愛なんて、生まれる前に空中分解していたのだ。永遠のものなんて何一つ無い。目に映るものも、映らないものも、命も、今この世に存在しているあらゆる物は、様々なかたちで壊れていくように決まっている。

「もう会わない方がいいのかな。」

ユキオの声だけが、ゆっくりと生まれて、夜明けの空気に溶けていく。街は静まり返り、まるで世界中で今息をしているのは、自分たちだけのような気がしてくる。彼はまだ、彼女を見ようとしなない。勝手な事を言っている。声にならないこえで、マリはつぶやいた。彼は自分もカコも手に入れたがっているのだ、と。

「最低だ。」

彼は何度も口の中で繰り返す。闇は少しずつ白み始めていた。明るさと共に、蝉の鳴き声が、この小さな空間と二人をぐるぐる渦を巻きながら囲み込む。朝露に湿る、ベンチ。人の眠る時間はなんて短いんだろう。もう朝が来た。ヒリヒリする、夏の夜明け。

マリはひどく疲れていた。他人が苦しんでいても、いつも冷たい

言葉で突き放すのが精一杯で、何人もの人を傷つけて来た。自分が傷つくのが一番恐い。その痛みを知っていても、他人に優しく出来ない。今はまだ、彼を受け止める言葉が見つからない。

彼はようやく顔を上げた。その目は底の無い井戸の水のように淀んでいる。そのまま立ち上がると、すぐ隣に座り、腰に手をまわした。首を彼女の肩に乗せる。彼は動かない。マリもただ、黙ってそこにいる。

「キス・・・していい？」

ユキオは小声で耳元で囁く。返事をする間もないまま、視界の光がさえぎられた。唇が近づいて来る。知らないうちにマリは目を閉じていた。息が苦しくなる程、それは長く続く。腰が強く締め付けられる。体温が一気に伝わっていく。

「もう一度、して。」

唇がさつきよりもしつかりと重なり合う。時間が止まる。キスってこんな感じだったつけと彼女は思い出す。唇と唇が離れると、最後に彼はうなじにも軽くキスをして、体を引いた。

「一回も二回も同じだ。久しぶり？」

「うん。まともなのは。聖のなんてキスのうちにはいない。この感じ、ずっと忘れてたわ。なんか、いい。」

「ばか。片がつくまで、待っててくれる？」

「分からない。全部あなた次第よ。」

次の日から、また変わらない生活が続いた。朝から晩まで筆を握り、キャンバスに絵の具をなぶり付ける。ただ、以前のような集中力が欠けている事にマリは気づいていた。彼に少しでも期待を持たせるような事をした自分を責める。説明出来ない感情が脳を支配する。まとまらない。それが色に、質感になって塗り固められていく。手紙を書こう。青い便箋に青いインクで。

『言いたい事はいくつかあるのだけど、性格上それを直接上手く伝

えることはきつと出来ないと思ったので、こういう形をとりました。正直、あなたが私の事をあんな風に考え始めていることに少し驚きました。

何と言ったらいいいのかはまだ分からないのです。でも、有り難うは言うべきなのかもしれない。

前にも言った通り、あなたの事は好きだし、とても尊敬しています。会話の出来る、唯一の人だとも思っています。待つてくれと言われてから、色々考えました。私なりに。でも、自分の気持ちが分からない。あの事が無ければ、私達は昔の距離感を保ちながら、変わらない関係を続けていたはずです。私との事で、あなたと力コさんが終わってしまうのは何だかいけない気がする。そこから得た私との関係が、うまくいくかどうか分からない。あなたに求められたから、あなたを好きだと思ひ込んでしまうのは、多分間違っている。そしていつか全部壊れてしまう。それが恐いのです。

前に一度だけ、私を愛してくれるかもしれないある人に出会いました。私も誰かを愛する事が出来るかもしれないと期待をしました。でもそれは全部、自分の勝手な幻想でしかなく、一人で傷ついただけの事でした。

それから、誰かを信じる事が恐くて仕方ないのです。そうなる事をさけながら生きて来た。

なのに今、こんなに身近だったあなたがまた、私を見ようとしてくれている。

こんな事があるなんて。きっと今、ひどく混乱しているのだと思います。

私は、あなたが思っているよりもっと汚れているのです。自分が嫌いでもいつも消えたいと思っている。その傍ら、誰かに助けて欲しいとも願っている。ひどい言葉で誰かを傷つけるのはしょっちゅう

うの事だし、自分勝手な行動で周囲を振り回したりもする。自分だけで精一杯。私達が近づけば、あなたは必然的にこんな私を知ってしまう。それがなによりも一番恐いのです。

私は来年三月、東京の美大を受験します。もしあなたと一緒になろうとしても、いつかはここを出るでしょう。

あなたは私を信じ過ぎている。でも私はそこまであなたを信じきれていない。もう傷つきたくないし、傷つけたくない。よく考えてみて下さい。」

ポストに手紙を投函する。マリはもう殆ど自分が分からなくなっていた。愛されたい期待が喉まで来ている。けれど、必死でそれを上から押さえつける自分がいる。

近頃マリはよく夢を見るようになった。

ベッド脇の青白く光るスタンドに照らされて、部屋の外の闇の音に耳を澄ました。

タバコの煙がゆらゆらと揺れるのをじっと見つめる。

虫の音が一定のリズムを刻む。

彼女は目を閉じ、瞑想にふけた。街の端の方では、どこからどこへ行くのか、貨物列車がガタン・・・ゴトンと寂しげに流れていく。深い青の中に黒い箱が揺れていくのを思い浮かべ、とてつもなく甘美な世界へと引きずり込まれていく。

Lionはバタバタと爆音を響かせ、荒れ地を走っている。革ジャンの背中にはL・i・o・nリーオンー。

私が彼自身なのか、別人なのか。どちらかは分からない。彼は薄茶

色の砂埃だけを残して、砂漠の野生動物達よりも速く駆け抜けて行く。あまりにも広いその荒野を走りながら、彼はひたすら孤独だった。

稲妻が見たい。薄暗く分厚い雨雲を引き裂くような稲妻が。そして俺はそれを見て何と美しいのだと言っただろう。もしもこの世に、音の無い稲妻があったら、世界中の子供達はきっとそれを恐れたりはしないだろう。純粹な心で、キレイだと感じるはずだ。けど大人達はどうか？ 偏った観念を抱いたままで、真実の美しさを見抜く事が出来るだろうか？ そして、俺自身はどうか？ 純粹さとはなんだ？ 失いつつある物。ああ、無くしたくはない。

気がつくと、道は街の中へと続いていた。

陽は高く、アスファルトをギラギラと照りつけている。それはあまりにも攻撃的で、光を受けた刃先のようだ。道は二手に分かれていた。遥か先にビルが建ち並ぶ道と、水も草木も枯れ果てた砂と砂利の道。

Lionは迷わず後者の道を選び、大きくハンドルを切ると、そのまま真っすぐに突っ切って行った。

しばらく行くと、道は大きく曲がりくねり、幾つものカーブを描いている。道の他には何も無い。色の無い渴いた木々がぼつりと時々視界に映るだけ。

もう何時間たつたのだろうか？

一日、あるいは一ヶ月。もう時間の概念すら無くなって来ていた。それから彼は、はっと息を飲んだ。

たどり着いたのは、始めに走り抜けていた荒れ地を180度以上は見渡せる大きな崖っぷちだったのだ。

目下には、共に駆け抜けた動物達が見える。エンジンを止め、バイクから降りると、彼はその崖の先端に立った。

俺はまた戻って来たのだ。

Lionはじつとその壮大な空間を見据えた。

目の前に広がる計り知れない世界を、ただ一本の地平線が空と陸とに隔てていた。

「会えない日が続くと思うとイライラする」

「・・・」

「俺、絵になりたい」

「どういうこと？」

「お前をひとりじめ出来るから」

返す言葉が見つからない。くすぐったい。彼のマリへ対する想いは日に日に大きく膨らみ、重くのしかかっていく。

今ココロを開いては、彼も私もきつと不幸になる。そして私は大切な人を無くさなくてはならない。マリは警告めいた一節で自分をごまかした。

「私、普段何考えてると思う？ちよつとでも汚れてるって感じた人、いっぱい頭の中で殺してるの。めちゃくちゃ残酷な方法で。死んじやえって何度も叫びながら。自分の代わりに、妄想がその誰かを殺すのよ。歪んでるの、生まれた時から。こうやって普通にしてるのがぎりぎりなのよ」

「けど、お前は昔から、言葉にしなくても俺の思ってる事、感じ取ってくれてた」

「『ふり』よ、分かったふり。アナタだけは無くしたくなかったから」

何が本当で、何が嘘なのか。口から出る言葉は、濁ったドロドロした水のように汚く、形をとどめていない。いつものデタラメ。何を言っているのか、分からなくなってくる。

「『なりそう』じゃなくて、もう好きだ」

「アナタの好きって、なに？」

彼女の中に、何故だか次第に怒りが込み上げて来た。攻撃的な口調で問いただす。

「俺が知ってる限りでの、お前全部」

「それは違う。私はあなたにニセモノしか見せてないわ」

「目に映るもの信じて、何がいけないんだ？俺、お前にキスした事、カコに言っただよ」

何でも正直に言ってしまうのだ、この人は。マリはあきれて何も言えなかった。

「『別にいいけど間違い起こさないでね』だつてさ」

ばかばかしい。結局は二人の問題なのだ。彼女の頭痛が激しく脈打ち始める。彼はこの問題の決着を、他人にゆだねようとしているのだろう。

「もついい。頭が痛い。切るわね、おやすみなさい」

受話器を置いた手には、じっとり汗が吹き出ている。

FILE 4 創造の想像

朝だというのに、太陽は無遠慮に照りつける。夏は刹那的で、夜はあまりにもみじかい。

マリがアトリエに付く頃には、そのしつかり塗ったファンデーションもすっかり剥げ落ちていた。いつもと同じサイクル。いつも同じ油絵の具の匂い。キャンバスに向かい、筆を運ばせる。けれどそのストロークには全く意思が伴ってはいなかった。おざなりの動作のみ。彼女の頭の中では、彼の言葉だけが炭酸の泡のように浮かんでははじけていく。目の前の青い絵の具も、気違いじみた無数の線も、無意味で滑稽に存在していた。

「ココロを開いてはいけない」

全ては誰かが仕組んだ巧妙な罠なのだ。マリは自分に言い聞かせる。自分を困惑させる為の。創り上げられた都合のいい世界なのだ。私が生まれた瞬間にまず、神とか何とか一般に言われている誰かが父と母と、この小さな街を創った。三歳くらいまでには、必要最低限のあらゆる物が出来上がり、自分は何の疑問も持たずにこの世界で育ち、それらと接触する。その誰かは自分に幾つかのちっぽけなアクシデントや試練や、平凡な安っぽい幸福に近いものをバランスよく配置する。きわめて完璧すぎない絶妙な人生を構成するのだ。たとえば父親を蒸発させてみる。絵筆を持たせる。ジュンと出会わせる。

マリは17の時、初めて日本を出た。確かに地図やテレビの画面に有るような、中国と呼ばれる国はそこにきちんと存在していた。しかし、彼女はそれさえも疑わずにはいらなかった。

私の知らないおかしな言葉を喋る人間達。いつも周りにいるのと

は違う人種。一日中黄色く曇った空。浅黒い肌をした老人。都市の至る所で繰り広げられる、巨大建造物の工事。もしかしてこれらは自分がここへ来る事が決まってから、急遽創られたのではないだろうか、と。アメリカやヨーロッパなんかも、本当はまだ無くて、自分がそこへ行きたいと望んだ時に初めて、地図で見慣れた形の大陸や、肌の白い青い目の人間を慌てふためきながら創るのかもしれない。

十代のありがちで自己中心的な妄想。しかし、マリは自分の不完全さは、人工的に創られた自身だから、そう理由付けしなければ受け止める事が出来ずにいた。神なんていない事は知っている。

彼は時々こう言うのだ。

「俺は神だ」

本当は純粹で、繊細で、他人の事ばかり考えている。さみしがりやで一人を嫌い、それだからこそ狂人的な妄想を展開するユキオ。マリの前でだけは、その両面を隠せず繰り広げていた。

嘘の塊のように、青黒い油絵の具がこつてりとタブローにこびりついている。だんだんとそれが不快に思えてきて、マリはアトリエを出た。トイレに入ると、いつものように洗面台の脇の隅にしゃがみこみ、タバコに火をつけて深く吸い込み、煙を吐く。そこへ、いかにもという感じでぴんぴんしてるくせに、いつもマスクをした芸術家気取りのミサトが入って来た。

「ああ、つかれた……。あんたも？ぼけつとして、どうしたの。」
彼女はマスクを顎にかけながら話しかける。

「べつに。あんたには関係ないことよ。」

「ふうん。それにしても、うまくいかないわ、描けないの。」

「描けないときはこうやってのんびりタバコでも吸ってるのが一番うそだと気づいたら、それ以上続けるなんて無茶だわ」

マリは、あのおとなの言葉を思い出していた。

「君たちの絵は嘘っぱちだ」

全力で否定していたおもいが、簡単に揺らいでいた。自分で自分から分らない。自分の中に、別のもう一人がいる。いつもいつも。その二人は、好き勝手に入れ替わったりするもんだから、マリはほとんど疲れ果ててしまう。

「あんた、ずいぶんようじやないの。」

「べつに余裕なんてない。でも普段デタラメで人に嘘ばかりついてる人間だって、絵ぐらいは正直に描きたいだけ。あせっても、もつれるだけだもの。」

マリは吸いかけのタバコを自分の腕に押し付けてみる。ちかちかとした、熱のような痛みのような感覚がひろがっていく。まるで心臓がそこにあるみたいに、焼き付けた部分が力強く脈を打つ。

「ちよっと、なにやってんの。」

ミサトがそのタバコを持つ手を払いのけて、靴で揉み消した。

「創りものの威力を試してみたかったの。」

マリの目は、何も見てはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124f/>

～ SWEAT SWEAT DAYS ～

2011年1月6日02時17分発行